

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：32662

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00142

研究課題名(和文)音楽創作による戦争協力 - 第二次大戦中のアメリカ作曲界を対象にして -

研究課題名(英文)Cooperation in War through Modern Music: A Study of "War Composition" in the U.S. during World War II

研究代表者

沼野 雄司 (NUMANO, YUJI)

桐朋学園大学・音楽学部・教授

研究者番号：00322470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第二次大戦期のアメリカにおける、音楽による戦争協力の様態を明らかにすることである。

考察にあたっては音楽プロパガンダについて、以下の3つの視点から考察を加えた。第1に戦争に直接かわる楽曲(行進曲など)、第2に戦争を肯定的に描いた楽曲(戦争を題材にした交響詩など)、第3に慰問に類する機能を持った音楽である。4年間の研究期間のうち3年目、4年目(2020-21年度)においてコロナ禍のためにアメリカの図書館を訪問できず、きわめて厳しい状況に陥ったが、当面得られた成果を2022年度の音楽学会で報告したのち、23年度以降には、今回かなわなかった現地での雑誌調査を行なう予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的にみて、他地域の音楽の受容は多くの場合、宗教伝播が戦争をきっかけにして起こっている。ゆえに「戦争と音楽」という課題は、一見すると突飛なように見えて、実は音楽文化の根幹のひとつに触れるものといえる。本研究は、近代戦争における「戦勝国側」の音楽プロパガンダを詳細に検討する中で、音楽がどのようなかたちで戦争をバックアップし、さらには戦争を導いたかを明らかにしようとするものであり、単に音楽芸術内部の力学のみならず、広く社会一般との関係を考察対象とする点において、大きな学術的・社会的意義があるものと確信している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the aspects of war cooperation through modern music in the U.S. during World War II.

The study examines music propaganda from the following three perspectives; First, music directly related to war (e.g., war marches), second, music that portrays war in a positive light (e.g., symphonic poems about war), and third, music that functions as a kind of consolation. During the third year (FY2020) and fourth year (FY2021) of the four-year research period, I was unable to visit U.S. libraries due to the Covid-19 disaster, making the situation extremely difficult. However, I believe that I was able to clarify the situation to some extent using indirect materials. The immediate results will be presented at the annual meeting of Musicological Society of Japan in 2022.

研究分野：音楽史

キーワード：現代音楽 アメリカ音楽 音楽社会学 音楽分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ドイツや日本などの敗戦国における「音楽による戦争協力」に関しては多くの研究が行われてきたものの、戦勝国側の音楽プロパガンダについてはこれまで注意が払われてこなかった。美術領域や映画領域においては戦争画、戦意高揚映画、戦争芸術家などの研究が戦勝国・敗戦国を問わず進んでいることを考えると、音楽分野でこれが等閑視されている状況には問題がある。こうした背景から本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、第二次大戦期のアメリカにおける、現代作曲家たちによる戦争協力の様態を明らかにすることを目的としている。本研究においては当時のアメリカ作曲家たちがどのような形で戦争に協力したのかについての歴史的ドキュメントを整理し、さらには音楽による戦争支持が楽曲の中でどのように実現されているのかについての様相を、他国および他芸術の例と比較しつつ明らかにしようとした。

3. 研究の方法

日本国内で集められる資料を検討比較した上で、当初は、2020年度アメリカ滞在において、滞在先のハーヴァード大学の図書館が所蔵する1939年～1945年の音楽雑誌を網羅的に調査し、さらにその結果を翌年度に吟味し、再調査するつもりだった。しかしコロナ禍のために2020年度には図書館は完全にクローズしており、雑誌を閲覧することはほぼ不可能だった。もちろん一部の書籍については図書館のpdfで閲覧することが可能であったが、本来の目的であった3種の雑誌の調査はいまだに出来ていないままである。これについては痛恨の思いが残る。もっとも、以下の項目で述べるように一定の成果をみることはできた。

4. 研究成果

4年間の研究期間のうち、最初の2年については資料収集などに関して順調に進んでいたものの、もっとも重要な位置づけにある3年目(2020年度)、4年目(2021年度)における現地調査は全く行なうことができなかった。これは想定外の事態であり、結果として、最後2年の研究計画は大きく変更、縮小せねばならなかった。

とはいえ、日本における関連資料の調査からは、さまざまなことが明らかになった。

まず、第二次大戦時に活発に活動していた現代作曲家(70名ほどをリストアップし、うち30名ほどについて考察をくわえた)の戦時中の動向を抽出、さらにそこで生み出された戦争協力作品をリスト化し、それぞれの作曲委嘱の経緯、編成、初演、録音、戦後の状況等についての調査を行い、それらの詳細についてある程度の認識を得ることができた。

アメリカの戦意高揚音楽があらわれるのは、当然ながら1941年の真珠湾攻撃以降であるが、この大事件の後にアメリカ陸軍航空隊(The Army Air Corps)がサミュエル・バーバーほかに依頼した大規模な楽曲の全貌はほぼ明らかになった。また、これらがとりわけ1943年を境に急増していることを定量的に把握することができたのみならず、アメリカ最大の作曲家団体「作曲家連盟 The League of Composers」が18人の作曲家に委嘱した戦意高揚音楽についてもほぼ詳細が明らかになった。“National Unity through Music”といったタイトルの論文や記事を、十分ではないものの収集できたのも大きな成果であった。

また、ハーヴァード大学の教授陣(とりわけCarol Oja)、戦争音楽の研究者(とりわけBen Arnold)とは、コロナ禍の中でも連絡を取り合い、協力体制を構築することができた。

先にも述べたように、最後の2年がコロナ禍の混乱により十分に使えなかったことは痛恨の極みであり、まだ最終的にこのテーマに関しては、統一的な論文、著書がまとまっていないが、これまでに得られた成果については、2022年度の日本音楽学会全国大会で発表予定である。

歴史的にみて、他地域の音楽の受容は多くの場合、宗教伝播が戦争をきっかけにして起こっている。ゆえに「戦争と音楽」という課題は、一見すると突飛なように見えて、実は音楽文化の根幹のひとつに触れるものといえる。本研究は、近代戦争における「戦勝国側」の音楽プロパガンダを詳細に検討する中で、音楽がどのようなかたちで戦争をバックアップし、さらには戦争を導いたかを明らかにしようとするものであり、単に音楽芸術内部の力学のみならず、広く社会一般との関係を考察対象とする点において、大きな学術的・社会的意義があるものと確信している。

本年度の研究(科研費とは関係がないが)においては、昨年度までのこうした成果をもとにして、

さらに大きな結果につなげようと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 両大戦間のアメリカ音楽：ニューディール期の音楽政策
3. 学会等名 国立音楽大学主催シンポジウム「第一次大戦後の音楽」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 日米の現代音楽の現状と展望
3. 学会等名 神奈川芸術文化財団主催シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuji Numano
2. 発表標題 Free Form as a Symbol of Pluralistic Activities
3. 学会等名 Documenting Jazz (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 冷戦と音楽文化：日本の場合
3. 学会等名 日本音楽学会東日本支部例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 Ear training as a military power : absolute pitch education during the war time in Japan
3. 学会等名 Harvard University Music Department Friday talk
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 音楽学の冒険：駄作・モーツァルト効果・FBI
3. 学会等名 ボストン日本人研究者交流会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 Current Situation on Performing Arts in Japan
3. 学会等名 Music From Japan 2021 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沼野雄司
2. 発表標題 現代音楽史をめぐって
3. 学会等名 日本アルバン・ベルク協会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 沼野雄司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 282頁
3. 書名 現代音楽史 - 闘争し続ける芸術のゆくえ	

1. 著者名 和田ちはる（編著）、沼野雄司、友利修、白井史人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治学院大学文学部	5. 総ページ数 170
3. 書名 愚かでない音楽をもとめて 音楽と政治：ハンス・アイスラー再考	

1. 著者名 沼野雄司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人工知能美学研究会	5. 総ページ数 321
3. 書名 S/N What if AI composed for Mr.S? (S氏がもしAI作曲家に代作させていたとしたら?)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------